里山域の森林景観の生態学的基本構造とその整備に関する研究（Ⅱ）
—野外ミュージアム「賑わいの森」—

藤　本　征　司

Ecological Studies and the Maintenance Concept for Forest Landscape in the Satoyama area (Ⅱ)—A Field Museum "Thousand Forests and Woods"

Seishi FUJIMOTO*

Summary

A maintenance model for forest landscape in the Satoyama area was represented as a Field Museum, "Thousand Forests and Woods—What can we meet in forests?". The field museum proposed here has three zones named Hohjo-no-Mori, Genshi-no-Mori and Nigiwai Hiroba. The three represent fertile woods in forest resources, primeval forests in future and a garden park with plentiful forest information, respectively. In discussion, I argued on the importance for forest landscape planning in particular reference to the ecological and theoretical analyses on the forest landscape architecture and the relation to the maintenance plan proposed in the other article (Fujimoto, 2008).

はじめに

暖温帯里山域における森林景観の生態学的基本構造の把握とその整備理論の確立を目的として、これまでに、整備対象地の現況分析や、分析結果などを参考にした、整備対象地を３つのゾーン（「生産の森」、「原始の森」および「情報の森」）に区分して維持していくことを骨子とする整備案の提示などを試み（藤本、2002）、また、その結果の大略を取りまとめた（藤本、2008）。しかしながら、前報（藤本、2008）での記述だけでは、提案された整備案の依って立つ考え方や方向性が、必ずしも充分明確化されたとは言えない。もちろん、整備案といった実践的意図を持って発想される案（plan）なるものは、如何なる場合にあっても、自然分析および社会分析において十全かつ客観的であることは不可能で、かつ不要でさえあるということもできる。すなわち、多分に主観的発想の域を出ないプランであっても、ある程度までそのコンセプトが指し示されてさえおれば、次には実行に向け歩を進めることが肝要で、その主観性は、Plan-Do-Seeの試行錯誤の繰り返しの後に、自から修正されていくはずのものと考えることもできる。しかしながら、このような実践重視の考え方は、もちろん、上述した通り、計画案のコンセプトの明示を前提とする

＊静岡大学農学部附属地域フィールド科学教育研究センター　静岡市駿河区大谷 836
Center for Education and Research of Field Sciences, Faculty of Agriculture, Shizuoka University.

ものであり、やはり、前報（藤本、2008）だけでは、いまだコンセプトの明示には至っていっていないと考えるのが妥当と思われる。

そこで、本報告では、筆者らが、里山域の森林景観の整備案の検討（1999～2002 年度）の手始めとして作成した、2005 年万博（愛知万博）国際アイデアコンペ応募作品である「野外ミュージアム『賑わいの森—森で何に出会えるか？』」（1999 年７月応募；藤本ほか５名、2000）の作品の提示ならびにその分析を進めることで、前報（藤本、2008）で提示した整備案の考え方やその方向性の明確化を試みることにした。

応募作品は、静大農学部附属地域フィールド科学教育研究センター・森林学研究室の卒業生等４名（佐藤守敏、吉野知明、岩瀬明子、櫻井良樹）および同センターの矢澤速仁氏との共同制作として取りまとめられた。特に、作品のイラストの大半は岩瀬さんによって書かれたものであり、このイラストなしにはこの作品は完成しなかった。岩瀬明子さんをはじめとする皆さんに感謝する。なお、前報（藤本、2008）と同様、本報告も、平成 11 年度～平成 14 年度科学研究費補助金（基盤研究 C(1)、里山の森林景観の基本構造と整備に関する総合的研究、課題番号　11660144、代表者・藤本征司）の助成を得て展開したものである。

応募作品

2005 年万博国際アイデアコンペは、財団法人 2005 年日本国際博覧会協会が主催し、愛知万博開催に際してのアイデアを求めて企画されたもので、1999 年７月末日に締め切られ、応募総数は 1955 点（海外 30 カ国、82 点）であった。本報告で取り上げた作品もその１点で、作成に先立って、愛知万博のメイン会場に予定されていた「海上の森」の現地視察を行ったうえ、共同制作者５人と議論を進めて、全体のコンセプトの明確化をはかり、まず、織り込み図左上の趣旨を書き上げた。そして、筆者が提起したイラスト原図を基にして、岩瀬明子さんがイラスト全体を書き上げ、それに各人のアイデアを盛り込んで修正を加え、締め切り間際に完成をみた。なお、本作品は、選考の結果、アイデア集には採用されたものの（藤本ほか５名、2000）、遺憾ながら入賞は果たせなかったことを付記しておく（理由としては、取り組み期間が短かったため、最後の詰であるレイアウトに難があったこと、学生諸君中心で作成することにしていたものの、筆者の考え方が全面に出過ぎた内容に終わってしまったことなど、いくつかの理由が考えられる）。

応募作品を織り込み頁に示した。原図はＡ１版１枚である。タイトルは、野外ミュージアム『賑わいの森』－森で何に出会えるか？－」とし、作品の主旨として、以下の文章を応募文（応募に際し求められた作品の要旨）に掲げた。

> 誰のものでもないが故に、都市のように賑やかな森。そんな森での雑多な出会いの果てに、本来の自然がおのずから甦り、来るべき時代の森林風景が、徐々にではあれ、浮かび上がってくるような野外ミュージアム。あえていえば、「原始の森」と「豊饒の森」、「『賑わいの森』情報館」と「モニタリングマッシュルーム『空海』」などの、いつかの対置を通して、単なる「ものの集合体」を超えた、本来の森にも、さらには空や海、冥界も含めた自然全体の本来の姿にも出会えそうな空間の演出をめざしているところがセールスポイント？

また、応募グループ名は、静岡大学演習林森林学研究室有志とし、岩瀬明子をトップに、以下、

櫻井、吉野、佐藤、矢澤および筆者の名を列記した。

作品中、レシピ（老婆心）よび「賑わいの森」情報館のところについては、文字が小さく読みづらいことと、また、分析に際し便利なように以下に再録し、原文にはないが、項目毎に文末に項目番号を付した。

＜レシピ（老婆心）＞

◎川や沢が流れ、雑木林（広葉樹天然生二次林）がけっこう広がる森林景観全体に目をつけ、川下に収容規模の大きな「賑わい広場」を配す。「広場」は都市と森の境界であり、人間と自然が互いに出会いあうお祭り広場となる。＜R１＞

◎「賑わい広場」の一角に「賑わいの森」情報館を配す。機能重視のモダンな建築物とし、周辺には充分な緑を残す。＜R２＞

◎広場の川上側に位置する森林景観を左右に二分割し、より自然性の高い方を「原始の森」、田んぼなどがある方を「豊饒の森」に見立てて、それぞれに若干の修景を施す。「原始の森」入口に配す磐境は、それを置くだけで、単なる二次林主体の森が「原始の森」に見えてくるほどの巨石でなければならない。それに対置させる「豊饒の森」の山の神も同様で、それだけで、将来の豊饒が完璧に保証されそうなほど立派なものをこしらえる。ただし、ともに自然豊かなエコパークなので、さりげない演出が大切。＜R３＞

◎言換えると、修景後も、二つの森には実質的差異が殆どないことになる。それでは何故、さして違いのない空間が敢えて二分されているのか？　違いは名ばかりで、しかも、それぞれが、「原始の森」、「豊饒の森」と呼ばれるには程遠い空間であってみれば、当然来場者からの非難や疑問が殺到し、論争を呼ぶ。従って、それは、論争を呼び寄せるための仕掛けに過ぎないと考えてもよい。また、人間と人間、自然と人間が和解し合えず、深く対立しあっている様子を暗に示そうとしているだけと解釈することもできる。以上のように考える場合は、二つの森のネーミングにはさしたる意味はないことになる。それに対して、来るべき時代の「自然－人間」共生系において、その甦生と融合が期待されているが、現状では、互いに引き合いつつも、相対立せざるをえない二つの目論見（自然自体の本来性の回復と人間にとっての豊かさの？）の象徴のようなものと読み取ることも可能である。そう解釈すると、将来、この二つの森が成熟しつつ融合しあう時、新時代の森林風景がおのずから浮び上がってくることになる？＜R４＞

◎二つの森が出会う「海上の丘」は、山頂など見晴らしのよいところに設ける。二つの森は単なるネーミングの差に過ぎないか、共に今だ未熟な状態にあるので、当面は、出会い合っても何も生み出せず、矛盾ばかりが露呈する。ここで出会うのは、奇石群、「ザクザク山」など、正体不明のオブジェばかりのようである。＜R５＞

◎つまり、境界領域に位置する「海上の丘」では、事物の持つ意味の両義化や希薄化が生じ、例えば、二つの森の中では確実に「お宝」もしくは「ゴミ」であったものが、「お宝」かつ「ゴミ」、もしくは、「お宝」か「ゴミ」かさえ不明のものへと転化する。すると事物は、結果的に、捨てても惜しくない「お宝」、もしくは捨てても構わない「ゴミ」となって、ここに放置される？　ここに、来場記念石をポイ捨てできる「ザクザク山」と「ゴロゴロ山」が設けられるのもそのためらしい。＜R６＞

◎モニタリングマッシュルーム「空海」もまたこのような両義的もしくは意味不明な構築物として配される。確かに、山頂から、地上の森、都市や空や海、さらには冥界までも見まわす「空海」は、すでに地上の矛盾を丸のみにするだけの力量を持っているのかもしれない。頭のテッペンに備え付けられたスグレもののモニタリングカメラ群は、例えば、いま問題になっている「絶滅が危惧される種」の生活なども詳細に見守ってゆくことになる。自然保護は彼の最も得意とする分野のひとつであり、さらに森林を取り巻く地球環境のｸﾞﾛｰﾊﾞﾙな保全にも多分重要な役割を果たしていくことになる。しかし、もちろんそれだけで、人間と自然の真の和解がもたらされるわけでは決してない。そればかりか、「空海」のこれ見よがしの面相と、近代科学を地でゆくような仕切りたがり屋の性格は、真の和解の最大の障壁ともなりかねない。もちろんエライ「空海」は、そんな危険も充分察知している。その高い能力にも関わらず、彼が、単なるキノコ、単なる「粗大ゴミ」とも取られかねない異形のオブジェ、さらには「賑わいの森」情報館の単なるセンサーに甘んじているのもそのためらしい。しかしそんな己を知る「空海」をもってしても、たぶん、自然と人間の真の和解が遠い道であることに変わりはないわけだ。＜Ｒ７＞

◎しかし、森での雑多な出会いと際限ないお祭りの果てに、時代の担う思考パターンがリフレッシュされはじめ、さらには、二つの森がしだいに成熟してゆくにつれ、やがて円環が閉じはじめる？　二つの森、そして自然と人間の総体が本当の意味で和解しあう、そんな時代がやがてやってくるに違いない。すなわち、そんな時代への期待をこめて設けられるモニュメントが、賑わい広場の一角を占めるストーンサークル「石舞台」である。「石舞台」は、単純な石組に過ぎないが、実は「賑わいの森」全体の隠れたシンボルであるらしく、文字通りお祭りの中心舞台となる。＜Ｒ８＞

◎森はダレノモノデモナイ空間なので、そこには、いかなる不法侵入も阻止しようとするような、強力なバリアがあらかじめ張り巡らされていることになる。けっこうな入館料を徴収されたうえに、きつい山道を歩かされる。磐境は完全なバリアであり、山の神もまたバリアとして機能する。しかしダレノモノデモナイ空間であることは、誰もが出入り可能なバリアフリーの空間でもあることも同時に意味する。従って、このようなバリアーバリアフリーの裏腹の関係に充分留意して、修景やバリアフリー対策に工夫をこらす必要がある。賑わい広場や情報館は出きる限りバリアフリーとするが、二つの森の中には、ことさらバリアフリーのための設備は設けない。「原始の森」では、部分的にはかなり歩きにくい箇所も残される。また、小型乗用ﾓﾉﾚｰﾙ(身障者専用)を情報館から「空海」まで敷設するが、このモノレールには、二つの森を分断するバリアとしての役割も持たせることにする。これは、モノレールがバリアフリーのシンボルであると同時に、バリアのシンボルでもあることを意味する(バリアフリーの問題は、さけて通れないのなら、この際開けっぴろげに議論してはどうだろうか？)。＜Ｒ９＞

◎森は究極的には出入り自由な賑やかな世界であり、それは「原始の森」でも同様である。従って、例えば「原始の森」に針葉樹の人工林がかなり存在していても、なんら問題はない。本物の「原始の森」とは、人間の庇護下におかれ、人間の影響を極力制限・排除する方向で管理されてアルようなヤワな森では決してない。人間からの影響を強く受けているにもかかわらず、それをものともしないほど逞しい森のことなのだ。本来その空間にとって無縁なものも自由に受け入

れてしまうほど寛容な自然が本来の自然なのだといってもよい。極論すると、本来「原始の森」とは、人間にとって略奪自由、ゴミのポイ捨て自由の空間だったはずなのである。このような観点に従うと、人間の庇護下にあるいわゆる「原始林」などよりも、略奪され放置されながらも力強く甦りはじめた雑木林や、略奪空間として造成されながらも人間のお荷物となり、粗大ゴミ同然の取り扱いを受けながらも黒々とその存在を顕示し続けてきた針葉樹人工林などからなる里山域の森林風景の方が、はるかに「原始の森」に近い存在だったのかもしれないということにもなる。以上のように考えていって、例えば針葉樹人工林を眺めていると、針葉樹林の方が広葉樹林よりも、地質学的にずっと古いタイプの森林なのであり、その意味では、針葉樹を含む森はそれだけで由緒正しい「原始の森」なのだという思いにも至りつく。＜R10＞

◎しかし、こんな森林風景が、「原始の森」と呼ぶには、森があまりにも未熟に過ぎるということも明らかである。だから、森を永年に渡り慈しみ育ててゆく努力が是非必要となる。とにかく巨木の森に育てていこう。広葉樹も大切だが、針葉樹も大切だ。針葉樹あっての「原始の森」なのだから？　だから針葉樹も慈しみ育て、もうほんとうに恐竜にさえ出会えそうな程の鬱蒼とした森に育ててゆこう。それから、「豊饒の森」の森だって同じことだ。針葉樹の巨木が林立していてこそ「豊饒の森」と呼べるはずだ。「豊饒の森」の針葉樹は手入れを万全に、枝打ちもぬかりなく進めておこう。そんな試みから、たぶん新時代の「原始の森」と「豊饒の森」の一端が浮び上がってくるに違いない！　これが「賑わいの森」作りの最後の処方箋である。＜R11＞

＜「賑わいの森」情報館＞

森林を巡る情報、特に森林とそれを取り巻く地球環境の総体の長期モニタリング情報の収集と発信を効率的に行なえる恒久施設。各種展示ホール、講演ホール、情報検索室、研修室、研究室、情報処理室、標本室などを設ける。＜N１＞

目玉となる公開展示は、

① 超大型モニターによる「森の賑わい」のビジュアル展示

「空海」や林内に設けたビデオカメラ群が撮影した映像のリアルタイム中継や、夜の様子や何かが出没した時の録画放映。生きた土壌動物やキノコなどの展示（画面いっぱいに拡大され動き回るおどろおどろしい土壌動物の群れ。キノコの傘が開いていく様子などを早送り画像で）。＜N２＞

② 「森林風景の変遷」のパネル展示

森のはじまり（石炭紀の森）、裸子植物の森から被子植物の森へ、人間がまだ夜行性の小動物であったころ、森からの流離、森と人間の闘争と共生、殺風景な現代の森。誰のものでもない世界から所有化された空間へ。＜N３＞

③「これが新時代の森林風景（里山）だ！」

多くの人に、「来るべき森林風景」をメディア自由で描いてもらう。＜N４＞

考　察

1．作品の分析(Ⅰ)―趣旨について

織り込み図左上の４つの段落では、本作品の「趣旨」が示されている。ここでの最大のキーワー

ドは「賑わい(賑やか)」であると思われる。第一段落では、森は静かか、賑やかかが、まず問われる。そして、それに答えるために、森林の認識論・存在論的性格が問われ、森林といった所謂「自然」が、各人の主観を離れて客観的に存在する事物の集合体なのでもなければ、各人の主観内部に宿る情感的・表象的な世界なのでもなく、これら主観と客観に先立って開示される何ものかであること、結果的に「出会い」概念によって了解できることが指摘される。すなわち、物心二元論を超え、主客に先立つ、現相的世界・知覚風景的現相（廣松、1982）の集合体を森林・自然の一次的有り様として了解すべきことが要請されていることになる。もちろん、この作品では、必ずしも、森林や自然の何であるかが、認識論や存在論に遡り、充分厳密に吟味されているとは言い難い。従って、この作品からだけでは、森林や自然が何故、以上のように了解されなければならないのかは、必ずしも明確ではない。しかし、少なくとも、景観（風景）としての森林、すなわち、整備や修景、管理といった実践論的課題が問題になる森林について考える場合には、主客の双方の問題に関わらざるを得ないという意味で、以上のような考え方が取り得るようになるだろうことは、了解できるものと推察される。

そして、第二段落では、第一段落の問いを受けて、森林は、上述したような森林の認識論的・存在論的性質からして、必然的に賑やかとなることを指摘する。すなわち、賑やかなのは、例えば、必ずしも、多くの生物が生息するからといった、事物の量（やその情報量）の多さによるものではない。そのような理由なら、何も「賑やかな」といった「感性」的な言い回しをする必要はない。生物種が豊かだとか、種多様性が高いとか、群集を構成する個体数が多いとか言えばすむ。そうではなく、第一段落で触れているように、森が主客に先立つ「出会い(出来事・事態)」の集合体のようなものなのだとすると、当然、その豊かさも、一義的には、事物の量の多さではなく、主客に先立って開かれる事態（出会いや出来事）、知覚風景的現相（廣松、1982）の集合の持つ情報量の大きさに起因することになる。そして、その場合、もう１つ重要なことは、「賑やかだ」というのが、客観的事実に関する形容ではないからといって、主観の側の判断、情感的・情意的判断に由来する事象とはいえないことである。すなわち、客観的判断でなければ、主観的判断なのだと考える思考パターン自体が認識論上の誤謬なのであり、ここでは、あくまでも、これら主観と客観の両者に先立つ知覚風景的現相の豊かさに、森の賑わいの理由が求められるだろうことを指摘している。第一段落との関連で考えれば、森には無限に近いほどの様々な気配や兆候が感じられ、だからこそ賑やかなのだということになる。そんな賑やかさの中には、「静けさ」などといった、賑やかさとは一見矛盾するような事態の生起（様々な気配や兆候）も当然含まれている。従って、このような主客に先立つ風景的現相が持つ情報量は、事物の集合体が持つとされる情報量よりもはるかに大きくなると推察される。すなわち、このような「賑わい」は、実在的（Real）なものの豊かさというよりも、潜在的（Virtual）なもの（ドゥルーズ、1992；小泉、2000）の豊かさと考えることもできる。森の賑やかさの理由は、次の段落で再び問題にされる。しかし、それは、一義的には、以上のような知覚風景的現相（出来事、出会い）の多様性の高さ中にこそ求められることを、前半の１～２段落では、指摘しているものと考えられる。

第三段落では、話が一転して、そんな森林の所有権の所在が問われる。しかし、これは、論点の移動というよりも、１～２段落での指摘からの必然的帰結の提示に過ぎない。すなわち、森林

が事物の集合体ではないのだとすると、必然的に、それは所有の対象外となり、いわゆる、網野（1990）が言うところの無主の空間、ドゥルーズ・ガタリのノマド的次元（Deleuze & Guattari, 1980）に属すことになる。これを物象化批判（廣松、2001）で考え直すと、自然や人間の社会的諸関係の総体の物象化が進むにつれ、諸関係の総体は、ものとものの関係に転化し、結果的に、所有関係等が成立するようになるが、物象化以前的な現相的世界の立ち戻って考えると、まず開かれ続けるのは風景的現相の方なので、その後に開示される主観や客観の側が、風景的現相としての森林の所有者となることは論理的に不可能だということになる。ここでは、以上のような、自然や人間に関わる諸事物や諸事象の認識論・存在論的関係（すなわち存在論的関係）に即して考えると、森林は誰のものでもない空間となり、また、このような無主的空間性に、森林の「賑わい」の理由を求めることができるようになることを指摘する。無主の空間であるが故に、森林には、そこに住むもの（定着者。従来からの山村定住民、定着的生物、自生種など、顕在的なもののすべて）だけでなく、様々なそこに住まないもの（非定着者。都会人、子供、非定着的生物、外来種、遺棄されたものなど、その場に無縁なもの、潜在的なもののすべて）もまた、自由に出入りする。すなわち、無主的空間であるが故に、森林は、異種間交流的で、多交通的な「賑わい」を呈するようになる（藤本、1998a；藤本、1998b）。このように考えていくと、その「賑わい」が、「都市のように」という形容によって言い表されているのも、納得のいくところとなる。

最後の段落では、そんな賑やかな森と人間との関係が、実践論の問題として、改めて問い返される。自然は、認識論・存在論的次元では、主客に先立って開かれる何ものかであるので、すでに一部触れたように、所謂、知覚主観、行為主体としての人間や、「客観」的な自然は、論理必然的に、その後に、二次的に開かれるものとなる。まず、我々は、このような「賑わう世界」の開示の中で、その都度二次的に開示され続け、リフレッシュ、リクリエイトされていく。また、同様に、所謂、客観的自然も、予め固定的に実在するものではなく、自然的諸関係の中で造りかえられていくと同時に、対人間的関係においても、常に造りかえられていくことになる。すなわち、人間の環境世界としての森林もまた、実践論的次元においては、実践的課題の展開としての風景的現相の開示の連続の中で、常に造りかえられ、我々の新たな環境世界としてリクリエイトされていくことになる。このように読み解いていくと、この最後の段落では、風景としての森林整備の目的が、自然と人間の総体の、真の意味でのリフレッシュ、リクリエイト、広義での「癒し」（頼富、2003；後述する）のようなものにあることが指摘されていると見ることができるようになる。

2．作品の分析(Ⅱ)―レシピ（老婆心）について

レシピ（老婆心）では、以上のような、主客に先立って開かれる「賑わいの森」の造景法について、細かく触れていく。まず、R１～３では、万博会場に予定されていた「海上の森」を整備対象に想定した修景計画の基本構想が指し示めされる。この、「豊穣の森」、「原始の森」、「賑わい広場」に３区分する構想は、前報（藤本、2008）の上阿多古フィールドを「生産の森」、「原始の森」および「情報の森」に分ける区分に対応している。R４では、２つに分かたれた「豊穣の森」と「原始の森」が、修景以前、修景以後とも、実質的には殆ど区分できないことを指摘し、従って、この両者を敢えて区分する理由が、結局、人間と人間、自然と人間との深い対立にあり、そんな対立図式（あい矛盾する自然本来の豊かさの追求と人間にとっての豊かさの追求という対立図式）を浮き彫り

にすることが、ここでの修景の目的であることを示唆しているものと考えられる。このような対立図式は、宮崎駿のアニメ「もののけ姫」の対立図式に繋がるもので、網野（1997）は、それを「自然」と「人間」という２つの聖域の対立として捉え直している。このような「もののけ姫」的対立図式には批判も少なくない（鷲谷、2001）。しかし、近代の進行とともに、物象化が進み、人間による自然の総体へのインパクトが激化し、しかも、それを、同じ物心二元論的思考パターンによってしか乗り越えようとしない、今日の深刻な社会状況を省みると、自然と人間を関係は、まず、このような対立図式で捉えてみることが是非必要となる。もちろん、認識論の次元で考えると、自然と人間は対立するものではなく、自然と人間の社会的諸関係の総体として、常に開かれ続けてきたものであるといえる。しかし、時代の変遷の中で、このような対立図式が成立してしまった以上は、その事実を素直に受け止め、解決への手立てを考えていくのが、自然で、意味ある思考パターンとなると考えられる。宮崎（1997）も、「荒ぶる神々と人間との戦いにハッピーエンドはあり得ない」としながらも、「憎悪を描くが、それはもっと大切なものがある事を描くためである」とし、対立図式を描くこと自体が目的なのではなく、もっと大切なものを描くための前提に過ぎないことを指摘している。

「海上の丘」（Ｒ５）は、二つの森に表されているような、人間と自然を巡る矛盾や矛盾の所在について、とにかく、来園者に深く考えてもらいたいがための修景なのだと考えられる。「海上の丘」では、「豊穣の森」と「原始の森」の双方において、プラス意味を持つとされるものの意味の希薄化が進行し、結果的に、ここに、意味不明なものが集積する（R６）。そして、それらは端的には「ゴミ」と見なされ、「海上の丘」は一見ゴミの山と化す。しかし、ここで大切なのは、たとえ「ポイ捨て」されたものであっても、必ずしも、それがゴミであるとは断定できず、場合によっては「お宝」なのかもしれないし、一義的には意味不明のものだということである。「海上の丘」は、明らかに、愛知万博のメイン会場に予定されていた「海上の森」からのネーミングである。従って、もし、捨てられるものがゴミであるのだとしたら、この修景計画は、無謀にも「海上の森」をゴミ捨て場と化そうとするアイデアだということになる。しかし、それは、ゴミであるとは限らず、従って、この修景は、海上の森をゴミ捨て場と化す企画には相当しない。認識論の次元では、「捨てられたもの」が捨てられた時点において生起しているのは、あるものの所有者からの遊離という事態であるに過ぎず、事後的に、それが遺棄されたゴミなのかどうかが判断されるだけなのだといえる。

すなわち、ゴロゴロ山やザクザク山も、自然と人間を巡る矛盾や矛盾の所在の象徴に過ぎず、最初からゴミの山と決まっているわけではない。ゴロゴロ山とともに、ザクザク山が設けられていることからもわかるように、ここに「遺棄」されるものは、「お宝」なのかもしれない。そして、さらに別のものである可能性も考えられる。網野（1990）は、近代以前における無主の場のあり方についての考究を進め、自然の総体が、本来、だれのものでもない無主の場であり、そんな無主の場の利用に際しては、人間は極めて謙虚で、初穂を供えることを常としたことを指摘している。このような考え方に従うと、無主の場である「海上の丘」に「遺棄」されたものは、ゴミでも「お宝」でもなく、一種のお供え物なのかもしれないということにもなる（お供え物は、持ち帰れないものである点で、ゴミともお宝とも異なる）。しかるに、近代人は、所有者から遊離したものを、ゴミかお宝かに区分したがる。これは、自然を、あらかじめ価値や反価値を内在化させた事物の

集合体と見なす、近代固有の、物心二元論的・物象化的思考パターンの現れであり、このような思考パターンの徹底化と、近代以降における、無主的空間のゴミ捨て場化は不可分の関係にあるといえる。以上のように、ゴロゴロ山などの修景の中で、来訪者は、自然と人間を巡る矛盾や矛盾の所在などについて、深く考えさせられるようになる。これがここでの修景の狙いといえる。

R７では、以上のような情報の総体の収集・発信者としての「空海」が取り上げられる。モニタリングマッシュルーム「空海」（MM「空海」）は、全宇宙風景（omniscape；沼田、1996）の情報収集者であり、矛盾のど真ん中にあって、錯綜する情報の総体を収集・整理している。このように、ここでは、「情報」の担い手たる空海が強調されている。しかしながら、彼の役割をそれのみに限定するのは早計である。MM「空海」は、もちろん、平安のマルチ人間、空海その人に通じている。頼富（2003）は、近代以降の文化的要素の特徴を「情報」と「癒し」であるとした上で、「その萌芽を、一千二百年以上も前の空海が、すでにその思想と行動で表していた」ことを指摘している。空海には、マルチ情報の担い手としての顔があるとともに、その裏面として、「癒し」の思索者、体現者としての顔も、明らかにある。たぶん、この両者が揃って、始めて空海となる。「情報」が空海の動脈ならば、「癒し」はその静脈である（頼富、2003）。「情報」が往路で、「癒し」が復路なのだと言い換えてもよい（なお、ここで言う「癒し」は、病的状態からのリハビリテーションとしての狭義の「癒し」を指すのではなく、思索や苦行の果て（？）の、「大自然、大宇宙などとの合一」（頼富、2003）のような事態の生起を指す）。すなわち、この平安のマルチ人間「空海」の化身であるMM「空海」もまた、マルチ情報の担い手であると同時に、当然、復路としての「癒し」の体現者でもあるはずで、この作品でも、そんな空海が表現されているものと見ておく必要がある。MM「空海」の情報収集は、あらゆるものに及んでいるが、特に、自らの風体からも了解できるように、「得体の知れないもの」に対する収集意欲は旺盛で、一見ゴミの山のようなゴロゴロ山やザクザク山も、彼の貴重なコレクションとなっている。MM「空海」は、現代という時代の示す矛盾を自ら体験し、矛盾の根源を探求していることになり、ここには、「情報」の担い手を超えた、真の意味での「癒し」を、行為によって直観しようとする、「癒し」に至る苦行者としての空海がある。

R８で示された「賑わい広場」の風景もまた、多分、空海の復路を象徴している。MM「空海」と「賑わいの森」情報館は、元々一対のものであり、どちらが欠けても、真の情報発信は不可能となる。菌類たるMM「空海」は、ｎ－１個のリゾーム（Deleuze & Guattari, 1980）なのであり、各所に出没しては、子実体を形成し、ある時には、マッシュルームタワーとなり、森林探査カメラとなり、そして「賑わいの森」情報館となって、自然と人間の総体の有り様を縦横に開示してみせ、自からの身体で、究極的な「癒し」の世界を表現してみせる。すなわち、MM「空海」が活躍する場に着目して考え直すと、「豊穣の森」、「原始の森」、「海上の丘」が、空海の「高野山」に、「賑わいの森」情報館、もしくは、「賑わい広場」全体が、空海の「東寺」に対応するものと解釈することもできる。梅原（2005）によると、空海は二つの中心を持つ楕円的人間であるが、それを場の問題として捉え返すと、高野山と東寺なのだということになり、この両者が存在して始めて、空海の世界が作動し始める。最澄の野外ミュージアムは、多分、比叡山という１つの山体からなるに過ぎない。しかし、空海の野外ミュージアムは、多分、高野山のみには限られない。たぶん、葛城・金剛山系、高野・竜神、吉野から熊野へと抜ける山岳地帯など、紀伊半島全域に及ぶとともに、海

を隔てた四国の総体にも繋がる広大な無主的空間に広がっている。しかしながら、その一方で、それは京都の東寺という限られた空間にも収斂している。ダイナミックでバイタルな紀伊・四国の風景世界とは異なる、その立体曼荼羅に典型的に認められるような、シックでエレガントな東寺の風景（砂原・梅原、2006）も相まって、空海のミュージアムはたぶん始めて成立する。以上のような見方に従うと、「賑わい広場」（R８）では、空海の広義の「癒し」に向けた復路の風景が示されていることになる。往路での、矛盾や矛盾の所在の象徴としてのゴロゴロ山やザクザク山は、一方向に積み上げられ、また、二つの山体へと分裂している（R７）。しかし、「賑わい広場」では、それが互いに繋がりあい、ストーンサークルとなって円環を閉じる。ここに広がる風景は、東寺のそれであり、シックでエレガントな里山的風景を醸しだす。しかし、もちろん、このことは、ここに至り、すべての矛盾が解消されることを意味していない。自然と人間の真の和解は、極めて遠い道なのであり（R７）、「空海」は再び、明るく強く、大笑しつつも、山岳修行へと旅立っていくことになる。

R９では、バリアフリーやバリアの問題が取り上げられている。ここでの、バリアフリーやバリアに関わる工夫も、一義的には、来訪者に色々考えてもらうための工夫といえる。また、どんなことを考えてもらおうとしているのかについては、やはり、森林の本来的無主性の問題だろうと考えられる。森林が無主的空間であれば、当然、それはバリアフリーであってしかるべきだということになる。バリアフリーにすることで、多くの人々が利用できるようになり、無主性の一端が保たれる。しかし、時には、そんな無主性を保持していくためにバリアが必要となる場合もあるし、バリアフリー化が新たなバリア（聖域）の設定に繋がることにも配慮が必要となる。無主の空間とは、文字通り、無主の空間であり、共有空間であることを決して意味していない。たとえ共有というかたちを取っているとしても、無主の空間を、皆の空間と見なすことは、所有化を主張していることになり、その意味で論理矛盾となる。上述したように、自然を無主の空間と思いなすことは、自然に対して真の意味で謙虚となることを意味し、無主の空間を利用する場合は、何らかのバリアを設けて、利用空間の限定をはかるのが常であった（網野、1990）。すなわち、このような謙虚な気持ちになって、無主の空間としての森林に向かうべきことを、ここでは指摘しているものと推察される。

R10では、「原始の森」の修景法に触れている。ここでの叙述も、これまでの考え方の対象を限定した再提起といえる。まず、「原始の森」もまた、レアル（実在的）なものではなく、バーチャル（潜在的）なものであり、このような自然の潜在性に着目すると、造成や復元の対象とはなり得ないとされてきた「原始の森」も、可能的な（Possible な）ものの実在化（Realization）ではなく、潜在的な（Virtual な）ものの現実化（Actualization）の考え方（ドゥルーズ、1992）に従うことで、充分、造成や復元の対象になってくることを示唆している。そして、このような考え方に従うと、本来、「原始の森」とは逆のイメージで捉えられてきたもの（ここでは、放置された針葉樹人工林や雑木林）の方が、より「原始の森」に近いものと見なせようになる。ゴミや略奪の意味が変化するのも、同様の理由によるものであり、物象化批判（廣松、1982、2001）や無主の論理（網野、1990）から考えていっても、同様の結論に到達するものと推察される。

最後に、R11では、以上のような「原始の森」や「豊穣の森」の撫育法に触れている。R10までの

叙述は、一見、これまでの森林保育の一般論からは極めて遠いところで論じられている嫌いがある。しかし、それは、真意ではなく、発想が逆転しても、慈しみ育てることの大切さに変わりはない。歴史の発展を信じる廣松理論は別にすると、ドゥルーズの遊牧民論（Deleuze & Guattari, 1980）や網野（1990）の漂泊民論には、農耕民的枠組みに対する批判が濃厚で、本作品のコンセプトも、およそその線に沿って示されている。しかしながら、このことは何も、次世代においては、農耕民的発想が無意味となることを意味しているわけではない。もしそうならば、それは、前世代的なものへの後退を意味する。矛盾の解消は、未だ潜在的なものに過ぎない「豊穣の森」や「原始の森」の現実化を待って始めて可能となる。従って、慈しみ育てる精神がなければ、現実的にも、次世代的風景の開示には至らないものと推察される。

3．作品の分析(Ⅲ)—「賑わいの森」情報館について

ここでは、まず、N１で、情報館の概要を示した後、情報館では、情報収集のセンサーであるMM「空海」を中心とするセンサー群からの情報の提示がなされることに触れる（N２）。MM「空海」が収集する情報が、全宇宙風景に関わるものである以上、ここでは、この野外ミュージアム内部で得られた情報のみならず、森での出会い、森を巡るフェノメナルな（現相的）世界、知覚風景的現相（廣松、1982）の総体が展示の対象となると考えられる。N２で示された情報提示が、現時点での空間情報の総体提示であるのに対して、N３では、それが歴史情報に組み換えられる。廣松、ドゥルーズ、網野などを参考にして振り返られた人間の歴史（森林・自然と人間の関係史）の提示が基本となるが、それを、自然史の延長線上に位置づけ直そうとしていることも、ここでの展示の特徴と思われる。自然の歴史と人間の歴史は、区分できても切り離しえない。その意味で、我々は多分、唯一の歴史しか持たない（マルクス・エンゲルス、2002）。森林・自然と人間の関係史がそのようになる至った歴史の淵源が、自然史の中に探られねばならず、それなくしては、我々は社会的諸関係の総体（マルクス・エンゲルス、2002）を内在化させえない。従って、そんな総体の変革（次世代的風景の開示）も困難となる。例えば、人間がまだ人類以前的存在であったころの「人間」の歴史は、生物進化史の概略を紐解くことからだけでなく、現在における生物の生活の探求（その長期モニタリングやそこから得られた情報の整理など）からも、ある程度まで了解可能となる。すなわち、現在における夜行性小型哺乳類の生活のモニタリングデータは、ある程度まで、人間が未だ夜行性小動物であったころの様子を再現してくれる（渡辺、2004）。また、人間の狩猟採取・遊牧民的な文化形態と農耕・工業的文化形態の淵源は、樹木の生活戦略の比較研究からも、解明可能となる（藤本、1993、1998a、1998b）。以上のように、N１とN２では、脱近代を指向するような考え方に立った情報提示がなされるが、もちろん、それが唯一の情報整理の仕方とは断言できない。N４では、さらに多様な次世代的森林風景の開示が同時に展示されるべきことを指摘しており、また、このようにして、始めて、より妥当的な次世代的風景の開示が可能となるであろうことを示唆しているものと考えられる。

4．総合考察

既述したように、この作品は、里山域の森林景観の整備案の検討（1999～2002 年度）の手始めとして作成したものであり、作品の「豊穣の森」、「原始の森」、「賑わい広場」は、それぞれ、前報の「生産の森」、「原始の森」および「情報の森」に対応している。その意味で、この作品は、前報

（藤本、2008）で示した上阿多古フィールドの整備案の原型といえる。もちろん、両者には、いくつかの相違も認められる。例えば、前者の「豊穣の森」イメージは、森林が人間にもたらす豊かさの総体を問題にしており、たぶんに里山的イメージで描かれている。しかし、後者の「生産の森」イメージは、豊かさの内実が木材生産に収斂しており、これは、両者の違いの大きなものの1つといえる。「賑わい広場」イメージと「情報の森」イメージにも差異があり、前者では情報集約に力点が置かれ、後者では情報発信に力点が置かれている。しかし、全体構想が、野外ミュージアム構想であり、賑わいの森構想である点では、両者は基本的には同一のコンセプトを持つ構想といえ、細部にも、多くの類似した考え方が認められる。従って、この作品から、提案した構想案（藤本、2008）のコンセプトが、かなりの程度まで読み取れるようになっているものと期待される。

すなわち、その構想は、まず、総体として考えると、野外ミュージアム構想として位置づけられる。そして、それは、さらに、「賑わいの森」、千（無数）の森（Thousand Forests and Woods）を表現しようとするミュージアム構想であり、さらには、ドゥルーズ、廣松、空海など、自然と人間の総体を巡る知の先人たちと同行して、単なる「ものの集合体」を超えた賑やかな森での雑多な出会いの中で、自然と人間の来るべき時代の風景が、徐々にではあれ、浮かび上ってくるようなミュージアムとなる。その意味で、それは、木材生産や森林整備・管理といった近代的試みや、森林浴といった狭義の癒し空間などを内包しているとしても、むしろ、比叡山や高野山、鞍馬山など、山岳修行の場に近い野外ミュージアムとなる。同じ、修行の場的なミュージアムでも、様々な形態があり得る。例えば、比叡山と高野山・東寺は、様々な建物や事物、哲学などを万華鏡のように散乱させ、その中で修行させることを目的としている点では共通している。しかし、両者では、修行（教育研究）に対する考え方が異なり、比叡山的ミュージアムでは、様々な教えを並列的に並べ、密教もまたそのひとつ見なされていることからも明らかなように、そんな修行の果てに、その中から自由に何ものかを選ばせることを狙っていると考えられる。それに対して、高野山・東寺的ミュージアムは、修行の果てに自由に選びとらせるのではなく、万華鏡の散乱の帰着先を暗に示し（空海にとっては、それが密教世界となる）、さらなる苦行の果ての、その自からの体得を促がす、より啓発性の高い空間となると推察される。すなわち、ここでの構想は、最澄と空海の対比で考えるなら、本報告での作品解釈からも明らかなように、最澄的ミュージアムではなく、空海的ミュージアムを指向しているものと推察される。フィールド体験は、導入期教育に必要なだけではなく、学問の終着点でもあり、究極の知を、修練の果てに体得しようとする知的試みといえる。その意味では、体験学習の場は山岳修業的な苦行の場となる。また、様々な体験機会を用意するだけで学び取りえるものは、高々知れている。知の総体の極地を掴み取るためには、東寺的な別の一極での学問研究も含めた、さらなる修練が必要で、そのためには、それを可能にする、より啓発性の高いミュージアム（教育研究プログラム）が必要となると考えられる。

なお、以上では、空海的プログラムの持つ、厳しい苦行的側面に焦点を当て論述したが、もちろん、これは、空海的プログラムの持つ一面でしかないことも、同時に指摘しておく必要があると思われる。梅原（1982）は、空海の密教を世界肯定の思想と見なし、空海の理論書をひも解き、また、仏教全般や西欧哲学との比較などを通して、その哲学の持つ世界肯定性、寛容性、健全性、オプティムズムを、縦横に指し示している。特に、空海の3大理論書の1つとされる「吽字義」の

解読では、その最後近くに出てくる、「是れ歡喜の義なり」を「大笑いすること」と読み取り、空海の最終相が、すべてが肯定され、すべてが大笑いしあっている賑やかな風景にあることを示唆しており、「賑わいの森」のコンセプトにも通じ、興味深い。すなわち、空海的プログラムは、否定の連続で、一見、自己弁護のための否定を繰り返しているだけのように見えなくもない。しかし、その否定の連続は、世界を寂滅の相で捉える、世界否定、人間否定的な諸哲学の全否定のためであり、その本質は、ドゥルーズ（Deleuze & Guattari, 1980）にも通じる、全生命的世界を全肯定する、明るく寛容性の高い哲学にあると考えられる。すなわち、その苦行的側面も、暗い風景を指し示すものでは決してなく、例え極めて厳しいものであるとしても、一義的には、楽しく学問研究し、笑いの中で、最終境地に至りつこうとする、明るい試みと解釈できる。

もちろん、以上に触れた、「空海」や「高野山・東寺」などは、今回分析した作品に即した比喩にしか過ぎず、意図する実体験の最終相も、例え、空海的な境位と通じるものがあるとしても、もちろん、それとはかなり異質なものといえる。すなわち、あくまでも、その基本は、分析した作品の「趣旨」で触れられているような、物心二元論を超える認識論の了解にあり、このような了解に従った、その実践的繰り返しにあり、また、それを通した、賑わう自然と人間の総体の体得にあると考えられる。物心二元論（物象化）批判の意味するところは極めて大きく、それは単なる認識論上の帰結に過ぎないものではない。確かに、３項（知覚対象―知覚内容―意識作用）図式（カメラモデルの知覚論）批判（廣松、1982）などから考えて、物心二元的思考パターンが認識論的には成立し得ないとしても、実践的世界（用在的世界（実践的な関心の構えに対して展らける世界現相）；廣松、1993）において、極めて有益な枠組みであるならば、これを頭から否定するには及ばない。しかしながら、物心二元的思考パターンは、行為や実践のレベルでも、そのあり方を歪ませ、結果的に、実りある実践を困難なものにしている。まず、物心二元的思考は、自然自体や他者自体の了解不可能性をもたらし、人間と自然、主体と環境の分断化や、実践（行為）目的の物象化を進める。そして、実践目的の物象化は、目的の固定化や、それに伴う、目的と手段の転倒を引き起こし、目的の物神化、実践で得られたものの主体の側への帰属化・所有化を助長させるに至り、結果的に、行為や実践が、その基幹的構図の中に本来的に持っている、行為の協演性と、「環境内部的局所に対象的変化を現成せしめ（る）」（廣松、1993）という行為の大目的を見失わせるに至る。その結果、実践の持つ価値評価の方向性を誤らせ、新たな風景の開示に失敗する。行為や実践の大目的が、以上のような、自然と人間の社会的諸関係の総体をより良い方向に変革していこうとすることにあるのだとすると、そんな諸関係の総体は人間の本質としても捉えられるので（マルクス・エンゲルス（2002））、行為の大目的は、時代に対応して、人間自身の思考パターンなどを変えていこうとすることでもあることになり、行為における大目的の喪失の意味するところは小さくない。すなわち、物心二元論的思考パターンののり越えは、認識論や存在論上重要であるばかりではなく、実りある実践を進めていく上でも、極めて重要な意味を持っており、意図する実体験の最終相の一極を、このような物心二元論の克服に帰着させようとするのも、その持つ、極めて大きな意義の了解に基づくものであると判断される。

最後に、今後の課題について取りまとめておく。まず、本報告では、景観（風景）整備の基礎理論が、今回取り上げた作品の分析を通して示されているだけで、叙述が多分に間接的かつ断片

的で、直接的かつ体系的な叙述には至っていない。すなわち、より体系的な基礎理論の完成が今後に残された重要な課題のひとつとなるものと考えられる。そのためには、森林といった自然と人間の総体の認識論、存在論、実践論の総体の体系付けが必要となる。また、そのためには、上述したような、森林動物を含む森林景観の長期モニタリングデータの収集・整理や、人間の農耕以前的・遊牧民的な行動パターンに繋がる樹木の世界での共存・競合関係の、より厳密な解明など、生態学的諸研究の推進・取りまとめも必須となる。また、自然と人間の総体の実践論では、時代の要請もあって、所謂「環境問題」の総体の解決に向け、実践的な環境倫理学の確立に期待が高まっている。このような実践的環境倫理学の体系化も必要で、そのためには、認識論や存在論、また、実践の存立構造の了解を対象領域とする実践基礎論のみならず、行為や実践の価値評価・妥当性評価（廣松、1988）の体系化も必須となる。さらには、開かれるべき主体と環境との総体（すなわち、風景）のインサイド問題（人間の側から見た社会・文化的問題群）の探求も無関係でなく、例えば、日本の心や美の源泉をたどり、それを歴史的に体系付ける試みなども重要な意味を持ってくる。本報告で取り上げた、自然と人間の対立図式は、明治以降で考える限り、たぶん、志賀重昂以来の近代的風景美の伝統（志賀、1991）と、それ以前的な農耕民的・里山的風景美の伝統の対立に帰着する（端的には、前者は奥山を指向し、後者は里山を指向している）。しかし、これらは互いに異質ではあるが、本質的には、近代以降の物象化、物心二元論的思考パターンによる洗礼を強く受け固定化された内的世界（廣松、1982）に過ぎない点では、多分一致している。すなわち、これらをのり超える風景を切り開いていくためには、近代以前、室町時代以前（網野、1990）からの風景美や思考パターンの源泉を辿ることも、重要な意味を持ってくる。空海もまた、そんな室町以前的な美的源泉の 1 つといえるが、もちろん、空海がすべてではない。すなわち、このような日本の風景美の源泉を体系的に辿ることを通して、次世代的風景の方向性を模索していくこともまた、今後の課題のひとつとなるものと考えられる。また、個別的には、「原始の森」についての検討や取りまとめが、特に不充分で、これもまた、今後の重要な検討対象のひとつとなると考えられる。しかしまた、景観（風景）整備の問題が、実践的課題であることを省みれば、基礎理論の完成に終始することなく、整備案に沿った修景計画や諸構想案の実行が同時的に進められていく必要がある。しかしながら、「原始の森」復元試験地の設定・調査研究（松村、1998；岩瀬、2000；大辻、2001 など）、「情報の森」整備に関わる「森林ステーション」の設定（藤本、1999）、上阿多古フィールド山頂付近の修景と富士山展望台の造成（土江、2003 など）、森林景観情報の資源化（藤本、1998b；寺嶋、2002）など、幾つかの試みは行ってきたものの、いまだ試行錯誤的状況に留まっている。すなわち、上述した基礎理論の完成とともに、これまでに展開してきたような理論やコンセプトに従った諸修景計画の実行もまた、今後の重要な課題として位置づけておきたい。

引用文献

網野善彦（1990）：日本論の視座．小学館．

網野善彦（1997）：「自然」と「人間」、二つの聖域が衝突する悲劇．映画パンフレット「もののけ姫」所収、東宝株式会社．

ドゥルーズ（1992）：差異と反復（財津理訳）．河出書房新社.
Deleuze,G.& F. Guattari (1980)： A Thousand Plateaus(trans. by B. Massumi(1987). Athlone Press.
土江奈緒美（2003）：遠州観音山周辺における景観整備と地域振興―特に山頂付近の修景計画とその実行―．2002 年度静岡大学農学部卒業論文.
藤本征司（1993）：北海道の高木類の生育・更新様式に関する比較形態・生態学的研究．静大演習林報告、17、1－64.
藤本征司（1998a）：高木類の生育更新・樹形特性から見た森林景観の基本構造の把握．平成７～９年度科学研究費補助金(基礎研究 C)研究成果報告書.
藤本征司（1998b）：静岡大学演習林における森林関連情報の資源化に関する研究．平成８～９年度特定研究研究成果報告書「広領域分野における学術・教育資料の情報体系分析と情報資源化に関する研究（代表、八重樫純樹）、75～96.
藤本征司（1999）：静岡大学上阿多古演習林での試み．森の公開講座（東京農工大学編）、291-296.
藤本征司（2003）：里山の森林景観の生態学的基本構造とその整備に関する総合的研究．平成 11～14 年度科学研究費補助金(基礎研究 C(1))研究成果報告書.
藤本征司（2008）：里山域の森林景観の生態学的基本構造とその整備に関する研究（Ｉ）―研究対象地の概要と整備案の提示―．静大演習林報告、32、・ ．
藤本征司ほか５名（2000）：野外ミュージアム「賑わいの森」―森で何に出会えるか．ここからはじまる森世紀 2005 年日本国際博覧会に関するアイデア事例集、44、財団法人 2005 年日本国際博覧会協会.
廣松渉（1982）：存在と意味（第一巻）．岩波書店.
廣松渉（1988）：新哲学入門．岩波新書.
廣松渉（1993）：存在と意味（第二巻）．岩波書店.
廣松渉（2001）：物象化論の構図．岩波現代文庫.
廣松渉（1990）：今こそマルクスを読み返す．講談社現代新書.
岩瀬明子（2000）：暖温帯里山域における「原始の森」の復元に関する事例研究―特に沢沿いの自然景観に着目して―．1999 年度静大農学部卒業論文.
小泉義之（2000）：ドゥルーズの哲学－生命・自然・未来のために．講談社現代新書.
マルクス・エンゲルス（2002）：ドイツイデオロギー（廣松渉編訳）．岩波文庫.
松村仁実（1998）：暖温帯域における自然景観モデル林の造成に関する生態学的研究．1997 年度静岡大学農学部修士論文.
宮崎駿（1997）：荒ぶる神々と人間の戦い―この映画のねらい―．映画パンフレット「もののけ姫」所収、東宝株式会社.
沼田真（1996）：景相生態学　ランドスケープ・エコロジー入門．朝倉書店.
大辻希代美（2001）：「原始の森」復元試験地の設備と長期モニタリング体制の確立について．2000 年度静岡大学農学部卒業論文.
志賀重昂（1991）：日本風景論．講談社学術文庫.

砂原秀遍・梅原猛（2006）：新版古寺巡礼京都（１）東寺．淡交社.
寺嶋泰子（2002）：暖温帯里山域における高木類の多様性とその情報資源化―上阿多古フィールドでの事例研究―2001 年度静岡大学農学部卒業論文.
梅原猛（1980）：空海の思想について．講談社学術文庫.
梅原猛（2005）：最澄と空海．小学館文庫.
鷲谷いづみ（2001）：生態系を蘇らせる．日本放送出版協会.
渡辺香織（2004）：夜行性小型哺乳類が出現する森林景観の長期観察―ネズミ類の生態学的地位の把握を目的にして．2003 年度静岡大学農学部卒業論文.
頼富本宏（2003）：NHK 人間講座・空海．日本放送出版協会.

野外ミュージアム「賑わいの

―森で何に出

森は静か？　それとも賑やか？
何の気配もない「もの」の集まりが森なのではない。
もちろんそれは頭の中にしかないイメージでもない。
そうではなくて、森は、
そんな静かな「もの」やイメージに先立ってある、
様々な「出会いの連続」！

どこからともなく出没した××との出会い、○○との別れ、
様々なざわめき、楽しい出会い、かなしい出来事、
そんな出来事が、時を置かず交響して、
私たちを包む。
そんな賑やかな「出来事の集合」、
それが本当の森の姿！

森はいったい誰の「もの」？
Xの「もの」？　Yの「もの」？　Zの「もの」？
それともみんなの「もの」？
みんな違う！
森は「もの」の集まりではないのだから、、
空や海や冥界と同じ、
誰の「もの」でもない世界！
誰のものでもないがゆえに、
都市のように賑やかな世界！

そんな賑わいを感じよう、考えよう、見つめ直そう、
そしてそんな賑やかな出会いの果てに、
甦らせよう！
私たちの豊かな環境世界と、
そして私たち自身を、、

レシピ（老婆心）

◎川や沢が流れ、雑木林（広葉樹天然生二次林）がけっこう広がる森林景観全体に目をつけ、川下に収容規模の大きな「賑わい広場」を配する。「広場」は都市と森の境界であり、人間と自然が互いに出会いあうお祭り広場となる。

◎「賑わい広場」の一角に「賑わいの森」情報館を配する。機能重視のモダンな建築物とし、周辺には充分な緑を残す。

◎広場の川上側に位置する森林景観を左右に二分割し、より自然性の高い方を「原始の森」、田んぼなどがある方を「豊饒の森」に見立てて、それぞれに若干の修景を施す。「原始の森」入口に配す整地は、それを置くだけで、単なる二次林主体の森が「原始の森」に見えてくるほどの巨石でなければならない。それに対置させる「豊饒の森」の山の神も同様で、それだけで、将来の豊饒が完璧に保証されそうなほど立派なものをこしらえる。ただし、ともに自然豊かなエコパークなので、さりげない演出が大切。

◎言換えると、修景後も、二つの森には実質的差異が殆どないことになる。それでは何故、さして違いのない空間が敢えて二分されているのか？　違いは名ばかりで、しかも、それぞれが、「原始の森」、「豊饒の森」と呼ばれるには程遠い空間であってみれば、当然来場者からの非難や疑問が続列し、論争を呼ぶ。従って、それは、論争を呼び寄せるための仕掛けに過ぎないと考えてもよい。また、人間と人間、自然と人間が和解し合えず、深く対立しあっている様子を暗に示そうとしているだけと解釈することもできる。以上のように考える場合は、二つの森のトーリングにはさしたる意味はないことになる。それに対して、来るべき時代の「自然―人間」共生系において、その甦生と融合が期待されているが、現状では、互いに引き合いつつも、相対立せざるをえない二つの目論見（自然自体の本来性の回復と人間にとっての豊かさの？）の象徴のようなものと読み取ることも可能である。そう解釈すると、将来、この二つの森が成熟しつつ融合しあう時、新時代の森林風景がおのずから浮び上がってくることになる？

◎二つの森が出会う「海上の丘」は、山頂など見晴らしのよいところに設ける。二つの森は単なるトーリングの差に過ぎないが、共に今だ未熟な状態にあるので、当面は、出会い合っても何も生み出せず、矛盾ばかりが露呈する。ここで出会うのは、奇石群、「ザクザク山」など、正体不明のオブジェばかりのようである。

◎つまり、境界領域に位置する「海上の丘」では、事物の持つ意味の両義化や希薄化が生じ、例えば、二つの森の中では確実に「お宝」もしくは「ゴミ」であったものが、「お宝」かつ「ゴミ」、もしくは、「お宝」か「ゴミ」かさえ不明のものへと転化する。すると事物は、結果的に、捨てても惜しくない「お宝」、もしくは捨てても構わない「ゴミ」となって、ここに放置される？　ここに、来場記念石をポイ捨てできる「ザクザク山」と「ゴロゴロ山」が設けられるのもそのためらしい。

◎モニタリングマッシュルーム「空海」もまたこのような両義的もしくは意味不明な構築物として配される。確かに、山頂から、地上の森、都市や空や海、さらには冥界までも見まわす「空海」は、すでに地上の矛盾を丸のみにするだけの力量を持っているのかもしれない。頭のテッペンに備え付けられたスグレもののモニタリングカラス群は、例えば、いま問題になっている「絶滅が危惧される種」の生活なども詳細に見守ってゆくことになる。自然保護は彼の最も得意とする分野のひとつであり、さらに森林を取り巻く地球環境のグローバルな保全にも多分重要な役割を果たしていくことになる。しかし、もちろんそれだけで、人間と自然の真の和解がもたらされるわけでは決してない。そればかりか、「空海」のこれ見よがしの面相と、近代科学を地でゆくような仕切りたがり屋の性格は、真の和解の最大の障壁ともなりかねない。もちろんエライ「空海」は、そんな危険も充分察知している。その高い能力にも関わらず、彼が、単なるキノコ、単なる「粗大ゴミ」とも取られかねない異形のオブジェ、さらには「賑わいの森」情報館の単なるセンサーにけんじているのもそのためらしい。しかしそんな己を知る「空海」をもってしても、たぶん、自然と人間の真の和解が遠い道であることに変わりはないわけだ。

◎しかし、森での雑多な出会いと際限ないお祭りの果てに、時代の担う思考パターンがリフレッシュされはじめ、さらには、二つの森が次第に成熟してゆくにつれ、やがて円環が閉じはじめる？　二つの森、そして自然と人間の総体が本当の意味で和解しあう、そんな時代がやがてやってくるに違いない。すなわち、そんな時代への期待をこめて設けられるモニュメントが、賑わい広場の一角を占めるストーンサークル「石舞台」である。「石舞台」は、単純な石組に過ぎないが、実は「賑わいの森」全体の隠れたシンボルであるらしく、文字通りお祭りの中心舞台となる。

◎森はグレノモノデモイイ空間なので、そこにはいかなる不法侵入も阻止しようとするような、強力なバリアがあらかじめ張り巡らされていることになる。けっこうな入館料を徴収されたうえに、きつい山道を歩かされる。整地は完全なバリアであり、山の神もまたバリアとして機能する。しかしグレノモノデモイイ空間であることは、誰もが出入り可能なバリアフリーの空間でもあることも同時に意味する。従って、このようなバリア―バリアフリーの裏腹の関係に充分留意して、修景やバリアフリー対策に工夫をこらす必要がある。賑わい広場や情報館は出きる限りバリアフリーとするが、二つの森の中には、ことさらバリアフリーのための設備は設けない。「原始の森」では、部分的にはかなり歩きにくい箇所も残される。また、小型乗用モノレール(身障者専用)を情報館から「空海」まで敷設するが、このモノレールには、二つの森を分断するバリアとしての役割も持たせることにする。これは、モノレールがバリアフリーのシンボルであると同時に、バリアのシンボルでもあることを意味する(バリアフリーの問題は、さけて通れないのなら、この際開けっぴろげに議論してはどうだろうか？)。

◎森は究極的には出入り自由な賑やかな世界であり、それは「原始の森」でも同様である。従って、工林がかなり存在していても、なんら問題はない。本物の「原始の森」とは、人間の庇護下にお排除する方向で管理されてルような切な森では決してない。人間からの影響を強く受けているに しないほど遠い森のことなのだ。本来その空間にとって無縁なものも自由に受けいれてしまう のだといってもよい。極論すると、本来「原始の森」とは、人間にとって略奪自由、ゴミのポイ捨て る。このような観点に従うと、人間の庇護下にあるいわゆる「原始林」などよりも、略奪され放置 た雑木林や、略奪空間として造成されながらも人間のお荷物となり、粗大ゴミ同然の取り扱いを受 示し続けてきた針葉樹人工林などからなる里山域の森林風景の方が、はるかに「原始の森」に近い うことにもなる。以上のように考えていって、例えば針葉樹人工林を眺めていると、針葉樹林の にずっと古いタイプの森林なのであり、その意味では、針葉樹を含む森はそれだけで由緒正しい「 至りつく。

◎しかし、こんな森林風景が、「原始の森」と呼ぶには、森があまりにも未熟に過ぎるということも 年に渡り慈しみ育ててゆく努力が是非必要となる。とにかく巨木の森に育てていこう。広葉樹も 葉樹あっての「原始の森」なのだから？　だから針葉樹も慈しみ育て、もうほんとうに恐竜にさな に育ててゆこう。それから、「豊饒の森」の森だって同じことだ。針葉樹の巨木が林立していて 「豊饒の森」の針葉樹は手入れを万全に、枝打ちもぬかりなく進めておこう。そんな試みから、 饒の森」の一端が浮び上がってくるに違いない！　これが「賑わいの森」作りの最後の処方箋であ